

第 21 回日本ボランティア学習学会 inNIIGATA
第 3 分科会 「活動実践から拓がるボランティアの可能性と未来」

日時：2018 年 11 月 25 日(日) 10:30～12:30

場所：新潟青陵大学 1 号館 1206 アクティブ講義室

担当者：司会進行 新潟青陵大学看護学部看護学科 4 年 捧日奈子

新潟青陵大学福祉心理学部社会福祉学科 3 年 下室友香

企画者 神奈川工科大学 3 年 鈴木康広

首都大学東京 OG 近藤常葉

事例発表者：千葉大学人文公共学府博士前期課程 1 年・学生団体おりがみ代表 都築則彦

参加者数：21 名

(全国のボランティア活動を行っている学生、大学ボランティアセンター職員等)

◎分科会コンセプト

本分科会のコンセプトは「学生ボランティアの自発性を刺激する」ことであった。

学生ボランティアの現状として就職活動の話題づくりや授業の一環をきっかけに体験の場としてボランティア活動に参加するケースが多く見受けられる。それによってボランティアの自主性という意味合いが形骸化されており、第三者からは環境や成果のみに注目され、無償労働、技術力や善意のアピールの場としての部分が印象に強く広まっている。また、学生ボランティアの中にはボランティア活動ならではの「持ち上げられた達成感」に浸り、ボランティア活動を続ける意義が自立していない状態が見受けられる。そこで本企画の趣旨としてはボランティア活動の個人の意義を言語化するために以下の目標を設定した。

- ①自分がボランティア活動を通じて世の中に達成したいゴールを見つける
- ②ゴールの中で自分がどの程度で貢献しているのか自分のポジションを明確化する
- ③そこにたどり着くための活動プランを細分化し、学生から実践できる段階まで落とし込む

これらの目標を達成するために「学生ボランティアの自発性を刺激する」ことが必要であると考へ、コンセプトの設定を行った。

◎分科会の流れ

はじめに、事例発表者には千葉大学人文公共学府博士前期課程 1 年生都築則彦氏をお招きし、自身の団体の立ち上げから現在に至るまでの活動について発表して頂いた。その後のワークショップは 4 名程度のグループ単位で行った。自己紹介をはじめとし、今までの活動を振り返りながら印象に残っていること、感じた思いや葛藤を言語化した。これらを踏まえて今後自身がどのように活動していくのかを考へ共有した。

◎成果と展望

今回の分科会では、改めて自身の活動と向き合い、普段自分がなぜこの活動を行っているのか、どんな思いをもっていたのか、そしてその活動に対して自分にできることは何なのかを考える機会になったのではないかと考える。いつもは活動したら終わりになってしまうことが多いと考えられるが、振り返る機会を提供することで、新たな発見や魅力に気づくことができていた。今後、参加者には振り返るワークで見つけた新たな魅力や課題などを踏まえて、学生の自発的な行動に結び付けてほしい。今回は 2 時間という短い時間であったため、話し足りない部分もあったと考える。そのため、3 月の全国学生ボランティアフォーラムの広報を行った。全国の学生との意見交換することでさらに自身の視野を広げてほしい。また、別の形あっても、自分の活動について考え振り返りを行うことの重要性を感じると同時に、ボランティアをする仲間との出会いを大切にしていってほしい。

◎改善点

ワークショップのときに A4 用紙に話したいことを書いてから発表していたが、テーマをパワーポイントで全体に向けて表示していたため、用紙に考えをまとめるのではなく、メモ程度に使ってもらうことで共有する時間をより多く確保できたと考える。また、ワークの進め方について、話が盛り上がっているときに次のテーマに移るという形になってしまったため、各班にファシリテーターを配置し、分科会の軸をずらさずに各班で注目した内容に特化して話し合いを進めても良いのではないかと考えられる。

(以上)